滋賀文化財だより
NO. 57
1981. 12. 31
●編集発行／財団法人滋賀県文化財保護協会

93. 草津市宝光寺遺跡 発掘調査略報

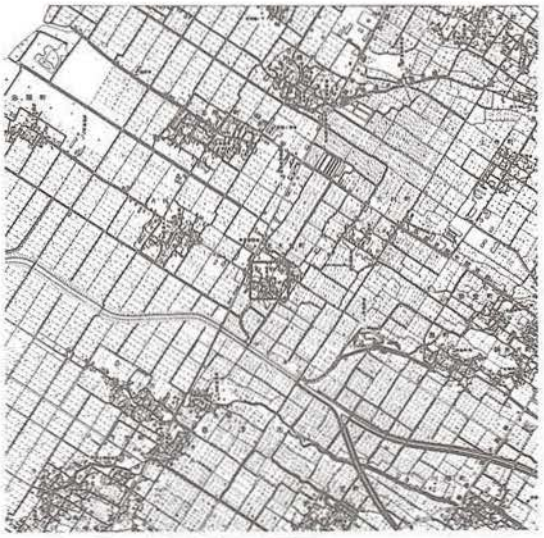
はじめに

草津市の湖岸沿いには、北大萱町の宝光寺遺跡を初め、下物町花摘寺遺跡、芦浦町観音寺遺跡、上寺町上寺遺跡、下寺町観音堂遺跡、片岡町東光寺遺跡、志那中町大般若寺遺跡、上笠町上の笠堂遺跡、下笠町下の笠堂遺跡、南笠町笠寺遺跡の計10か所の白鳳寺院跡が所在する。これだけ狭い地域にこれほど多くの寺院跡が所在する例は全国的にもめずらしく、その密度の高さは大和の飛鳥地域に匹敵すると言われている(1)。これらの遺跡は、これまでほ場整備等により何度か事前調査が行われたが、建物遺構を確認するまでには至らなかった。そこで、草津市教委はこのうちの1つである宝光寺遺跡の試掘調査を行い、その解明に努めようとした。

宝光寺は、白鳳4年天武天皇の勅願により僧定恵が開基したと伝えられる(2)寺院で、草津市の北西部北大萱町に所在する。同町の現集落内には、白鳳時代に溯る瓦が多量に散布し、また条理地割と異方向の正東西南北を示す道路や水路が残っている。その中でも集落西側を流れる水路は正南北に長く延び、寺域西限の溝と考えられる。この溝は南端で東に折れ、寺域の南西隅を形成しているようにみえる。しかし、寺域の北限・東限は地割にあらわれていないため寺域の規模を判断することは難しい。

調査は昭和55年11月（第一次調査）と昭和56年9月～12月（第二次調査）の2回実施した。第一次調査では、寺域を1町半四方と想定し、伽藍中軸線が寺域を二分割しているものと考え、その中軸線上にトレンチを設定した。この調査では建物遺構は発見されなかったが、現宝光寺本堂の西側のトレンチより瓦溜りが検出され、建物跡に近いことが推測された。瓦溜りの瓦は残りがよく、軒丸瓦・軒平瓦とも多く出土した。また、南滋賀廃寺・穴太廃寺・榿木原瓦窯などにみられる方形瓦が発見されたことは注目すべきことである。

第一次調査の結果、仮定した中軸線上には建物がないことが判明したため、第二次調査では寺域を2町四方とし、その中軸線上に5つのトレンチを設定した。



第1図　宝光寺遺跡位置図　　1／40,000

このうちいちばん北端のトレンチからは東西に走る溝状遺構と平安時代の柱穴が検出された。また、現宝光寺本堂の西側のトレンチでは瓦溜りが検出され、前回の調査で発見された瓦溜りがさらに東側へ広がっていることが確認された。そして、本堂前では瓦積基壇が発見された。

遺構

現宝光寺本堂前で検出された瓦積基壇は、東西15m以上、南北16m以上の規模を持ち、西辺と北辺が確認された。東へはこれよりさらにのびると考えられるが、現在道路が走っており制約されている。また南へももう少しのびると思われるが、これも道路により切られており、残存の見込はないであろう。

瓦積みは西辺の大部分と北辺の一部を検出し、北西隅を確認できた。瓦積みのいちばん多く残っている所は西辺北側で、最高11枚、高さにして40cm積まれている。使われている瓦は半截平瓦がほとんどであるが、ところどころに重弧文軒平瓦が見られる。中でも西辺のいちばん北端は軒平瓦が揃えて積まれ、装飾的な意味を持っていたかも知れない。北辺の瓦積みは本堂があるために西端の一部しか確認できず、また本堂の東側では基壇端を確認するには至っていないので、瓦積みがどの程度残っているかは不明である。

基壇は粘土・砂礫を互層に版築されている。基壇中央部は５～10cmの厚さできれいに版築されているが、西端はかなり乱れている。基壇土は最高80cm残存する。

第一次調査により検出された本堂西側の瓦溜りは、さらに東へ広がっていることが今回確認された。ここから出土した瓦は、完形またはそれに近いものが多く、基壇に近接していることを考慮すると、この基壇上に建てられていた伽藍の瓦が廃棄される際に、ここにまとめて捨てられた可能性が強い。

なお、第二次調査の際、いちばん北端のトレンチから検出された東西に走る溝状遺構は、推定寺域の南限からほぼ１町半の位置にあり、寺域溝の可能性がある。しかし、この溝からは瓦片の他に黒色土器等も出土し、宝光寺の建立時に掘られたものかどうかは現時点では判断できない。今後さらにこの溝を追跡し、寺域溝か否かを決定する必要がある。

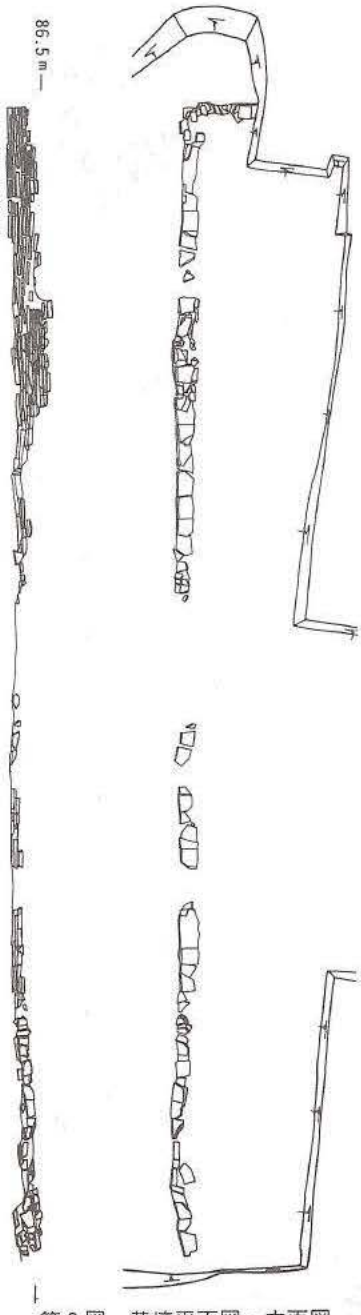
第２図　推定寺域とトレンチ設定図　　１／5,000

遺物

遺物は瓦が大部分を占め、おもに本堂西側の瓦溜りと基壇西側の瓦溜りから出土した。軒丸瓦は単弁系３型式、複弁系３型式、分類不能２型式の計８型式がある。１は素弁八葉蓮華文で中房が小さく、１＋８の蓮子を持つ。花弁は薄く、中央に稜線が入る。周縁は２段になっているが施文はみられない。２は１と同じ内区を持つが、周縁が狭く輻線文を施す。１は赤褐色の色調を呈し、焼成があまい。これに対し２は黄褐色の色調を呈し、焼成が比較的堅い。１には丸瓦部が一部残存する。３は単弁蓮華文軒丸瓦の破片である。花弁は肉厚で中央に稜線が入る。蓮子は１＋８であるが、同一円周上にはなくサイの目状にならぶ。この型式はこれ１点のみの出土である。４は複弁八葉蓮華文で中房が大きく、周縁に面違い鋸歯文を施す川原寺系の瓦であるが、蓮子数が１＋５＋11である点で、１＋５＋９の蓮子を持つ川原寺式と異なる。川原寺系の軒丸瓦は檀木原瓦窯で多く出土している(3)が、１＋５＋11の蓮子を持つものは認められていない。５は４と同じく複弁八葉であるが、中房が小さく蓮子数が１＋６と少ない。周縁には狭く粗雑な面違い鋸歯文が施されており、４の退化した型式と考えられる。これは基壇西端の瓦溜りから多く出土し、基壇上の建物に葺かれていた可能性が強い。６は５と同様の文様形態であるが、蓮子数が１＋８と多く、中房径・花弁長ともやや大きい。周縁形態は不明であるが、おそらく５と同様になると思われる。この型式は檀木原瓦窯に類例が見られるが、蓮子形態等若干異っている。宝光寺からはこれ１点のみの出土である。７は従来から宝光寺に特徴的な型式と言われてきた瓦で、小型の蓮華文を４か所に配し、その間を三葉の花弁が区切っている。周縁部は内側に面違い鋸歯文、外側に線鋸歯文を施す。この型

基壇西辺と北辺の一部

西辺北端の瓦積み



第３図　基壇平面図・立面図

式は２点しか出土せず、実際に宝光寺に使われていたかどうかは疑問である。８は花弁数が26と著しく多く、蓮子数も１＋７＋12と多い。周縁部には線鋸歯文が施され、他遺跡に類例を見ない。本遺跡からは２点出土した。軒丸瓦は以上の８種であるが、このうち白鳳時代のものと考えられるのは１～６で、７は白鳳時代に属するかどうか不明である。８は時期的に下がると考えられる。

軒平瓦は重弧文を持つもののみが出土し、それには三重弧文(9)、四重弧文(10)、七重弧文(11)の三種がある。このうち三重弧文と四重弧文のものには、弧文の断面の丸いタイプと四角いタイプがあり、七重弧文のものは四角いタイプだけである。弧文の断面の丸いタイプは黄褐色の色調を呈し、焼成があまい。これに対し、断面の四角いタイプは淡灰色の色調を呈し、焼成は堅い。前者は後者に時期的に先行すると考えられるが、弧文数の多少による時期差は不明である。

平瓦は凸面格子叩きのものが大部分を占め、一部に縄目叩きを併用する例がある。縄目叩きのみの平瓦は認められない。凹面には布目痕と枠板痕が残り、１枚の瓦が円筒を四分割した形態を呈していることにより、桶巻作り(4)により製作されたと判断される。

丸瓦は凸面に縄目叩きを施した後、ナデにより調整している。一部には縄目が完全に消されているものもある。丸瓦に格子叩きが１点も認められないことは、平瓦に縄目叩きのみのものがないことと対称的で興味深い。

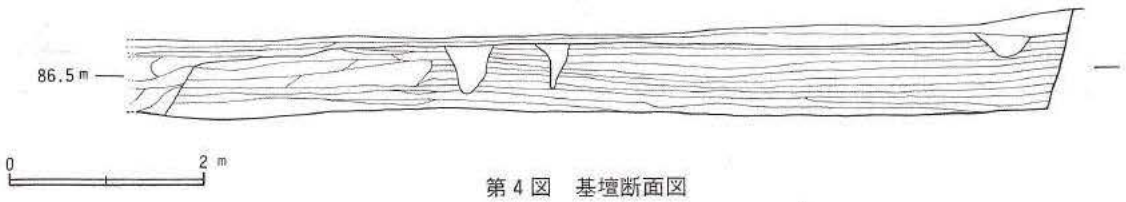
12は方形瓦である。この瓦は榿木原瓦窯から多数出土し、大津市西部地域に特徴的な瓦と言われているが、対岸である宝光寺からは２点出土した。破片での出土なので原形を推測し難いが、おそらく平瓦的な機能を持つと考えられる。出土数が極めて少ないため、実際に葺かれていたかどうかは不明であり、今後の資料の増加を待って判断したい。

まとめ

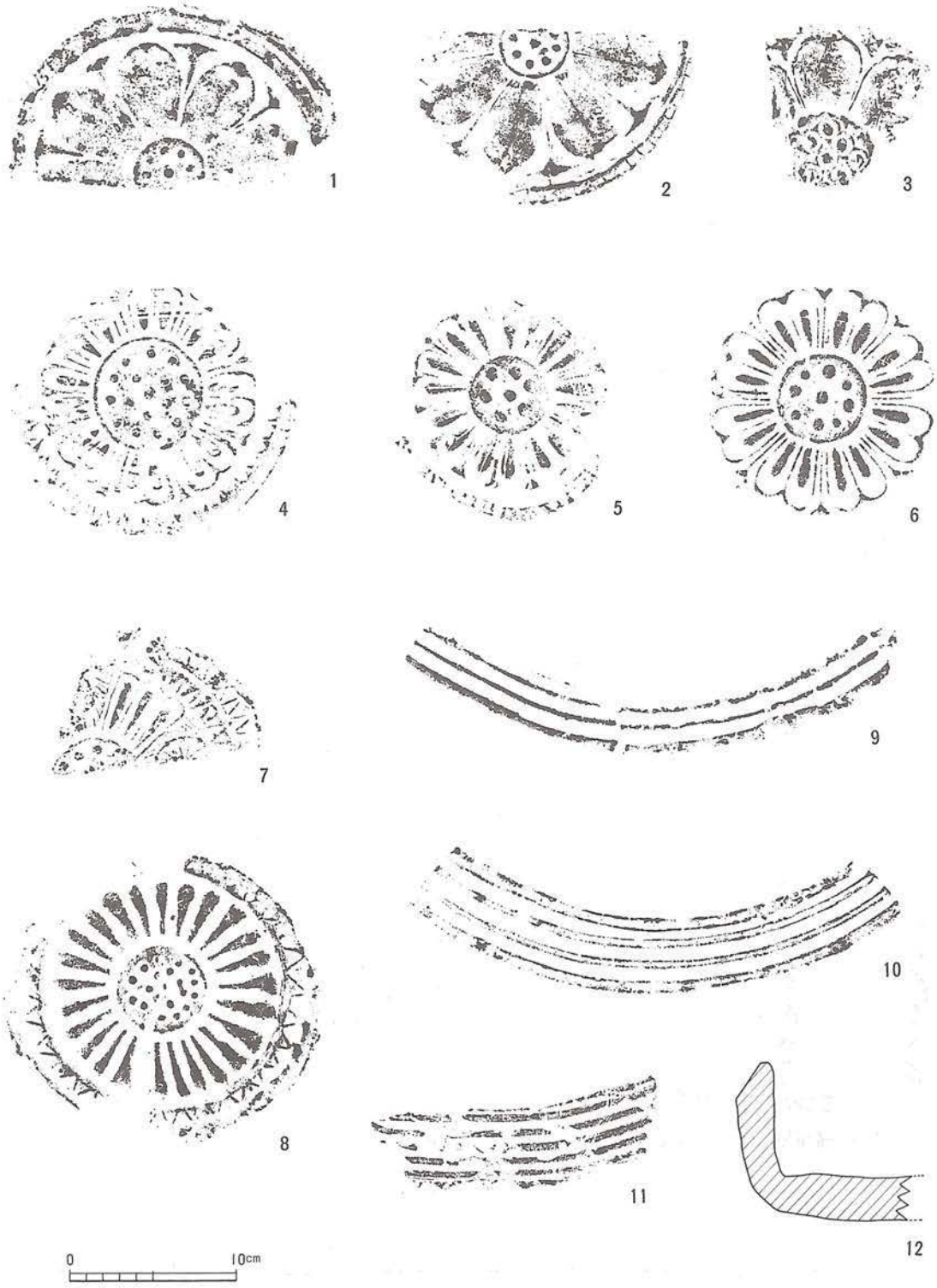
今回発見された瓦積基壇は、規模的には金堂または講堂のものであるが、ここに葺かれていたと考えられる軒丸瓦が比較的新しい様相を呈し、また基壇の版築状況が割合粗雑な点で講堂の可能性が強い。いずれにせよ伽藍中軸線は寺域西限の溝から約 100m の所にあり、寺域を２分していると考えられるため東西２町の寺域が想定できる。南北は二次調査で確認された溝を北限と仮定すると１町半となるが、この溝の性格が不明なため、今後の調査成果を持って判断したい。

また、大津宮との関連については、瓦積基壇である点、方形瓦が出土した点で大津市西部の白鳳寺院と共通し、何らかの影響下で草津市域の寺院が造営されたと推測される。このことは草津市内の他の寺院跡の解明を待ってさらに検討する必要がある。（藤居　朗）

注(1)『草津市史』第一巻(1981)、(2)「興福寺官務牒疏」、(3)滋賀県教育委員会『榿木原発掘調査報告』(1975)、(4)佐原真「平瓦桶巻作り」『考古学雑誌』第58巻第２号(1972)



第４図　基壇断面図



第５図　宝光寺遺跡出土　軒丸瓦・軒平瓦・方形瓦